

高山

高山の原生林を守る会

(たかやま)

会報 第 50 号

記念号

2004年10月



観察会素描 鈴木 昭子 (第一回観察会参加者)

名にし負う高山のブナにむか対たひ佇ち生かされてある天地おもふ

驕りなるか地球の地肌搔き削り開発せむとす時の為政者

守ることそは護らるることブナ林の伐採跡にしばし佇む

木と水が光伴ひ輝けるそのままがよし仙水沼の辺

百貫の値打ちを秘めし湧水池囲みて人ら保護を図れる

水底の呼吸の如く湧き水は盛り上がりつつ木洩れ日ゆらす

シラビソの林に積もる新雪をかくく沈めし兎の足あと

美味き水は森の力にありと説く力のこもる説に諾ふ

廃牧のなだりに水槇植糸ゆけば鋏振るごとに汗のたばしる

天つ日は雑木林に分け入りて木の悉く影をひきたり

地の天辺にはた宙の底ひに住むわれか心ひとつで住み分けてをり

会報50号に寄せて 高橋淳一

「高山の原生林を守る会」が発足し、早いもので17年余りが経過しました。そして、この度、会報も創刊から50号を数えることとなりました。改めて、その一つ一つを読み返すと感慨深いものがあります。

ワープロも無く、方眼紙に文字を書き込み、新聞記事を貼り付けて作った原稿。「高山の原生林を守る会ニュース」創刊号は1987年6月29日の発行でした。現在であれば、粗末で読み難く、とても人前に出せる



ような代物ではありませんでしたが、「スキー場開発を何とか止めたい」、その一心で作ったことを今でも鮮明に記憶しています。内容は「守る会」の設立に関わるものや、福島市への「公開質問状」など、まさに反対運動真っ只中というものでした。

その後、1年余りは「白紙撤回署名：18050名」や18回に及ぶ現地調査を実施し、関係機関への陳情も積極的に実施しました。しかし、この時点での解決には到底至らず、状況が好転するきっかけとなったのは、1991年に、吾妻連峰が白神山地や知床に続いて森林生態系保護地域の指定を受けたことによるものでした。その後の活動においては、「高山」の森林生態系保護地域への区域設定（編入）に向けて、協議会（代表：星一彰福島県自然保護協会会長）を組織し、調査報告書の作成や関係機関への陳情を行い、その結果、「高山」は1995年2月山頂から標高1250m付近（通称：フンドシ）までが生態系保護地域となりました。この間、会報作成にワープロが導入され、初期の会報様式が確立し、総会や観察会、写真展開催の案内が掲載されるようになりました。また、森林生態系保護地域設定を期に、定期的な観察会を開催するようになり、会報にも、観察会の様子や参加者の感想が織り込まれるようになって行きました。

さらに登山道の荒廃や湿原の裸地化についても、レポートや提言が多く見られるようになり、視点が開発阻止から、「自然と人間との関わり」に明確にシフトした時期でもありました。そして、現在の会報のスタイルになったのは、第15号（1995年12月）からで、発行も年4回となりました。あれから9年、35回の会報はA4版換算で3000ページに達するまでになり、森や花の紀行文、そして歴史やエッセイと幅広い情報を提供できるまでになってきました。しかし、何と言



っても、これまで継続できたことは、当時、全国的なリゾート開発ブームの中、反体制的な活動に対し、誹謗中傷を受けながらも会の設立、その後の活動と、献身を惜しまなかった会員各位の確固たる信念と結束によるものであります。今後もその強固な関係を維持していくことは当然であり、会報の充実を図り、情報、価値観の共有を進めてまいりたいと思います。

私がこの会に入会して、はや3年がたった。最初は皆さんと山登りができて楽しいなと思っていたが、次第に、植物観察にのめりこんでゆくようになった。それもこれも、佐藤守さん達の熱心なレクチャーや情報提供に触発され観察の面白さの虜となったからである。それからは、佐藤守さんから教えて頂いたフィールドを初めとして、吾妻・安達太良山系や昔ヤマメ釣りに通っていた溪谷、故郷の阿武隈山地などをデジカメ片手に徘徊して数多くの花々と触れ合うことができ、休日は充実した日々を過ごしている。

最近になって感じるのだが、なぜ素晴らしい花と出会えるのだろうかという疑問が湧いてくる。偶然と言ってしまえばそれまでだが、花を開かせるのは植物の唯一の自己表現、何か話しかけて来ているのだろうかと考えることもある。開花は種を残すための受粉の手段という解釈だけでは味気ないではないか。

花が人間に向けて話しかける(?)言葉の解釈は人それぞれと思うが、それを理解するヒントに「貴方は何故そこに咲いているのですか」という問いかけがあるのではないかと思う。そうすると「私は昔からここに住んでいるが、この先安心して住めないような気がする。人間に安心して住める家があるように、私の家はこの森なのです。森に住む樹や草、鳥や動物たちは共に助け合って生きている私たちのかけがえのない仲間なのです。この仲間がいなかったら私たちは生きてはいけません。私たちの家を守ってくれませんか。」などと答えて来そうな感じがする。実際に聞こえては来ないのだが。

植物にとって森なり草原なり湿地なり砂浜は生活する場所であり住む家なのだ。自然の植物は、様々な種類の植物どうし共同体社会を形成して生活している。そこでの生態系システムが維持されてこそ、安心して住めることは皆さん周知のことと思う。

私は霊能力者でもないし運命論者でもない。しかし出会いというものは、何らかの縁があるのではないかと考える。私事で恐縮だが、私の妻は長年リウマチで苦しんでいる。私も最初はその不幸な運を怨んだが、最近では「私の妻は難病に罹ることになっており、罹った時に私に助けを求めたために縁が結ばれた。天は難病に罹った妻を助ける相手として私を選んだ」と解釈して、介助にあたることにしている。不思議なもので、そのように考えてからは、良い整体療法士に恵まれ、リウマチも少しずつ快方に向かっているのだ。その療法士は自然治癒力を基本として、自己免疫力の向上を目指す治療を続けている。ここでも自然の力の偉大さを感じるようになった。第一、妻が難病に罹らなかったら、私も魚釣り三昧で、何をしていたかわからない。妻が難病に罹って初めて殺生を止める願掛けを行い、山歩きや自然観察を行うようになったのだ。このことも、私が自然の花と触れ合う縁と考えている。だからこそ、花の言葉に耳を傾ける義務があるのではないかと今は考えている。特に一昨年の「花紀行」取材以来、鬼面山や土湯周辺で実に多様な花たちと出会うことができ、写真に記録することができた。その時はただ「楽しい」だけだったが、最近とみに「あの花たちは何かを訴えたかったのか」と気がかりになっている。

幽霊ではないが、何かを話したくて目の前に現れるとしたら、やはり、花達が何か危機的状況にあるのではないか。「義を見て立たざるは勇無きなり」という言葉がある。これから、花達の境遇を調べて、問題があるとすれば解決方法は何かを考えてゆきたい。もしそれが無駄であったとしても。



アケボノソウの蜜腺溝に花蜜を飲みに来た虫を捕らえる小型蜘蛛。この蜘蛛はこの花に羽虫が来ることを知っていたのだろうか、網を張らずに捕らえた。小さな食物連鎖。森の生態系を垣間見た気持ちでした。福島市の荒井地区山中にて。

山岳のお花畑や高層湿原を歩くハイカー達も、すでに「義」を見ているのだ。また自然保護を勤めとする担当部局もしかり。「立つ」ことは「踏み荒らしをせずに登山のマナーを守る」ことであり「自然保護への具体的施策を積極的に実施する」ことなのだ。努力を惜しまなければ、人生粋に感じて成否をあげつらう者はいないだろう。要は努力することだと思う。

南方熊楠は紀州熊野の山中で粘菌と出会い、訴えを聞いた。そしてエコロジーの概念を日本に初めて紹介した。彼は、森林というものが動植物の共同体社会であり、曼陀羅と考える。人間だけ特権階級で別枠という考え方を否定し、紀州熊野の原生林や神社の森を守る闘いを進めたのだ。まさに「義を見て立った」のである。このことは最近NHKの番組で放送されたが、まさに正義を見た思いだった。

あるいは花たちは「人間が、今まで自然の仲間に助けられて生きて来られた恩を忘れて、これ以上仲間達を見捨てるようなことをすれば、今度は人間が自然に見捨てられて生きていくことができなくなるぞ」と警告を発しているのかもしれない。人間も植物や動物も、自然界の曼陀羅では、等しい仏性なのだ。

仁さんの森のコラム

森のための「税金」

平成 16 年 9 月 19 日 渡辺 仁



いま、全国的に花盛りなのです。何がというと、「森林環境税」論議です。『現代林業』6月号の特集「地方自治体の環境税・水源税の今」によると、38都道府県がこのような森林環境税設置に取り組んでいるらしく、福島県もそのひとつなのです。

福島の場合には、「森林との共生を考える県民懇談会」という話し合いを経て、現在は森林審議会では話し合いが進められている様子です。懇談会にしても審議会にしても、公募委員がいますし、公開と意見募集も行っていますので、その意味では「県民参加」による仕組み作りを行っているということは「可能」なのかもしれません。

そしてまた、環境省が構想する「温暖化対策税（環境税）」も来年度の導入を目指していて、「森林整備」のための財源確保が着々と進められているわけです。環境税ではガソリン1リットルあたり2円程度課税ということで、石油を使う人ほど税金を払う仕組みなのですが、地方自治体の森林税は、一律500円（高知・岡山）あたりで決定するようで、まあ「たいしたことない」といえる額でもあるわけですが、「環境税を払う」という意識が重要という側面もあるようです。

ところで、複数の自然保護団体に入会している個人だったりすると、「自然保護のため」に年間数万円を支払っているという人も少なくないと思います。その他にも例えば「価格の1%を環境保護のために役立てています」といった企業もあるわけで、そうして集められた基金が、民間の自然保護NGOの活動に役立っていたりするわけで、当会の活動にも多少は回ってきていると思います。意識のある人は、税以前にも何某かのお金を環境のために支払っているわけです。

お金がなければどうにもならない問題はあるにせよ、お金を出せば環境保護が図られるかというところほど単純ではなく、「森林環境に回るお金」には、やはり問題が少なくないと思います。「森林保全」とか「治山事業」いっても、大規模林道「飯豊・檜枝岐線」のような土木工事は今も少なくないわけで、新たな県民参画のあり方という課税を検討するには、そのまえにこれまでの事業を洗いなおすという作業が不可欠なのだろうと思います。

「森林環境税」というだけで、なにか環境に貢献できるような気分ができてしまうとすればそれは良くないことです。

記念号に寄せて

高山の会と私 白澤 和子

高山の会、感激その一

的場川の観察会です。春先だったかしら、明るい雑木林をガサガサ分けて行くと、川と言うにはあまりに清々しくやわらかい流れなのです。水辺の緑が丈を伸ばし始めた、そのあたりの石を回ってコロコロと弾けていました。

高山の会、感動その一

植林の始まりです。峠の牧場跡地は樹林を一本残さず拓かれた急斜面の荒地となっていて汗と涙を流して去っていった人たちの虚しさに満ちていて茫然となるのですが、そこに苗木を植えて水源の森復元という会の行動にたちまち熱くなってしまいました。その後欠席が続きましたが、5年計画ですもの、後2回あります。5分の3の参加でしたら、森を造った時の一人だと話しても良いのでしょうか。

高山の会、嬉しいその一

久しぶりに参加しても穏やかな姿でお見かけする高橋氏、奥田氏、佐藤氏の存在です。懐かしくほっとする気持ちになってしまいます。

高山の会、困惑その一

会費の安さです。年会費500円。そのとおりに納めているのは私だけかもしれないと不安なのです。だってあの会報「高山」も届くのです。体感できるブナの道の語り、カワラナデシコは山で会いたい一番の花・・・と多くの楽しみと刺激をいただいています。

私は、自然の恵みに感謝する生き方と発言し行動する生き方をずっとこの会から学んできました。これからもどうぞよろしく。

高山の会と私 柳内 景子

高山の会をどのようないきさつで知ったのか忘れることの多い私にはどうしても思い出せません。現在会のホームページをお気に入りに入れてありますので時々引き出しを開けて楽しいものを取り出すように眺めさせて頂いております。

会報は頂くとまず、今後のスケジュールを拝見。それぞれの観察会やボランティア行事を自分が参加した気持ちであれこれ楽しんでおります。このように私にとって会の行事はいつもお客さんでしかありません。参加すればスタッフの皆様、参加者の皆さまより元気を頂いています。頂きっぱなしの私ですが、今後もお世話になります。50号を祝してカンパイ！

会報50回に寄せて 伊藤順子

たった原稿用紙半分か1枚程度の原稿を纏めようとしていて改めて8ページの会報を作る事の苦勞がわかった気がしています。それを50回も定期的に！・・・本当に有難うございます。

いろいろ意見はあるかと思いますが、「高山」の会報がいつも同じ構成で変わらないので、方向音痴の私は助かっています。たまにしか行かないスーパーが、行く度に売り場が変わっていると欲しいものを探すだけで時間を取ってしまいイヤになりますが、会報「高山」は、いつ見ても何処に何があるか一目瞭然で老舗の風格ですね。中々観察会に出られない私ですが、当分は会報会員で今後ともよろしくお願い致します。



「高山を守る会と私」

佐藤久美子

私が高山を守る会と出会えたのは、奥田さんからの紹介でした。「ユックリ歩くので、私にピッタリだよ」と声をかけて頂き、本当に良かったと感謝しています。初参加は、1998年10月11日、薬師森観察会。姥湯温泉を横切り、美しい紅葉が印象に残っています。それからは、予定の優先順位を観察会を第一番として参加する様になり一年を通して、春夏秋冬、どの季節も教えてもらう事は山ほどあり、毎回新鮮な驚きがありました。それで、気が付くと皆勤賞を連続3回も頂いていました。



入会6年目で思う高山の会の魅力とは、会の方々の自然を大切に思う強い心と、何度となく同じ質問にも何度となく答えてくれる頼もしい抱擁力。それと、無理をせず、みんなの安全を第一に考えてくれる事です。

今年は、アテネオリンピックで、日本人選手の金メダルラッシュに日本中の人々が勇気を貰った様に、頑張る姿には、人々に感動を与えます。高山の会も、会報50号発行は、金メダルを授与ではないでしょうか？次の金メダルは、鳩峰峠が緑の森になった時でしょうか？「継続は力なり」今後とも高山の会の活動が末永く続きますように。私も、一緒に歩む事により教えて貰った知識を少しでも、自分の周りの人たちに伝え、自然の大切さを知って貰いたいと思います。

戦争を知らない世代？ 渡辺 仁

リゾート開発から「高山の原生林を守る」活動が、どんなものだったのかを私が知ったのは、3年ほど前に『ブナが危ない』（無明舎出版）を読んだ時でした。「高山開発」の昭和62年頃といえば、私は長野県に住んでいて、信州でもさまざまな自然破壊の問題を耳にはしていましたが、遠いふるさとの山で、こんなにも熱い運動が展開しているということは知らなかったのです。

たぶん、最近になってこの会員になった私のような方々には、当時の熱い活動を全く知らない人もいるのかもしれませんが。しかしよく考えると、「熱い」は何も激しい反対活動ばかりを言うわけではなく、「自然」に対する情熱を持った個人個人の想いが原点でもあるという意味では、一歩進化した活動を展開しているといえるのかもしれませんが。

どんな組織も、最後は「ひと」に尽きると思います。そして組織は、静かに遷移する森のように、「多層な植物集団」でもあり、私もその森の中に飛んできた小さな種子なのかもしれません。

「執念とエネルギー」の日々 小林 滯子

この夏の酷暑のため、当方の体調がすぐれずおりましたために長い間ご無沙汰してしまいました。なんとと言っても年齢には勝てません。

守る会の会報も50号発行の節目を迎えられる由、当初から関わってこられた代表、奥田さん、守さんの能力と実行力に対し、感謝申し上げます。また観察会や植林など熱心に参加された方々の熱意と努力に対してもありがたく存じております。

我が家の前から高山が仰げますが、そのあおい山を守るために千二百票余の署名を集めた執念とエネルギーとを今はただ懐かしく思い出しております。それもみな当時の穂積先生や幹事の皆さんの個性と専門性に支えられてのことなのですが・・・。

今回のことにつきましては、お役にも立てず心苦しく存じますが、ご海容の程お願い致します。

(04. 8. 30)

私の賢治のこぶしの樹 佐野 一子

場所は宮城県七ヶ宿町長老地区。長老神社入り口にそのこぶしの樹はありました。

高さ20メートル近い。春になると花が万単位ほどに咲くのです。真っ白な花と香りは周囲の木々の芽吹きと相まって見るものの心を圧倒しました。私には賢治のマグノリアの木の童話を思い起こさせ、しばしの間うっとりで見上げている時間がとても好きでした。いつしか“私の賢治の樹”と名付けました。丁度、半田山の桜が満開の頃です。でもここ3、4年は仕事の都合で行けずじまいでした。そして去年の秋になってやっと時間を見つけこぶしの樹に会いにゆきました。一见して、なに？なに？なに？・・・・・・。そのこぶしは太い幹が払われ、2メートルは越している樹のめぐりに高さ6メートル位のH型鋼が支柱として2本。その支柱をワイヤー（ゴムで保護はしてあるけど）で5ヶ所ほどぐるぐる巻きつけられ無残な姿でたっていたのです。どうして？どうして？私は動転してしまいました。切り払われた太い幹が根元近くにたくさん横たわっていて・・・・私は自分の身体の一部が切られたような思いで半分泣きながら車を運転して帰りました。長老神社入り口の白石一七ヶ宿間の車がひっきりなしに通る道路のそばです。

家に帰ってその夜、樹木医の資格を持つ佐藤さんに事情を話しました。「詳しいことがわからずに言うのはおこがましいですけど、そういう処置の仕方は最悪の状態であると講習会で教わりました」とがっかりした声で言ってくださいました。内容が分かりません。誰に聞けばいいのか。私の頭からはこぶしの哀れな姿が離れず冬をすごしました。雪が解けるのを待って、時間を見つけ見に行ったところで何もできません。双眼鏡でそれでもあちこち残された枝から800ヶ近いつぼみを数えました。花の季節になっていつもの倍位の大きさの花を見ました。花たちに咲いてくれてありがとうと私は静かに語りかけました。そしてこの夏の終わろうとする頃、ようやく長老湖近くの南蔵王ユースホテルのペアレントである手塚さんにお目にかかりました。おだやかな方で私の質問にやさしく答えて下さいました。

3年ほど前、花はひとつも咲かなかったこと。樹幹に長く大きな空洞ができていて枯死寸前だったこと。長老神社入り口にある大事な樹ゆえに残す方法は鉄の支柱を使わざるを得なかったこと。枝を切って樹に負担をかけないようにすること。長老地区の人達みんなで考えた末の処置だったこと等々・・・・。地区のみんなが力を併せて樹を守った過程を聞きながら私の気持ちは少しずつ軽くなるようでした。「でもやっぱり鉄の支柱を使うということはちょっとと思います」というと「道路のすぐそばに立っている樹でもあり、他に迷惑をかけることは許されないのではばらくはこのままの状態で行くでしょう」と話されました。「他の町の方がこぶしの樹をそういう目で見えてくれたということは嬉しいです。」といわれました。「このユースホテルに来て間もない頃、こぶしの花が咲いている夜の風景を見ましたよ。周囲がゴーストと白く浮いているとても幻想的なものでした」目を細めて教えてくださいました。

単にその地区の樹であつたても広く見れば地球という星に生きる樹でもあるのですから、私はそういう心でいつも自然を見つめていきたいと思っています。先日、蔵王町役場に用事があつたとき長老湖のそばを通り、このこぶしの樹をながめていきました。残った枝から若い枝葉を伸ばしはじめているのを見て“がんばるのよ”と祈るような気持ちでした。

私の賢治のこぶしの樹は、確かにいきいきと伸びています。



野鳥の森植生観察会に参加して

ごんどうただつぐ
権藤齊嗣

8月29日は台風16号接近中で本会の開催も危ぶまれたが、幹事さんの好判断で磐梯山から、野鳥の森へ変更して盛会裡に終了できた。

私は、2月の信夫山観察会以来2回目の参加であった。野鳥の森とゆうことで野鳥との出会いも期待したが多勢に恐れをなしたか上空を舞うびいひよろろのトンビだけ確認できた。私なりのポイント地点は「ヒノキとブナのもたれ木」、「オシャグジデング」、「ナガオノキシノブ」、「シダの宝庫」の4箇所であった。

野鳥の森駐車場でトチノキ、チマキザサの観察のあと、観察会スタート。途中キノコを発見して

大騒ぎ。圧巻は茶色のチチタケ。本当に乳白色の液体がほとぼし出る食用キノコである。私も嘗めてみたが渋かった。途中省略し第一のポイント「ヒノキとブナのもたれ木」山側にブナ、谷側にヒノキ。広葉樹のヒッパリ側、針葉樹林のツッパリ側。成る程相補完している。「この勝負50年経ってもつかんでしょう」と、佐藤さんのご託宣で先へ。皮が良く燃えるウタイカンバ、クロモジの葉につける蟻の考察、青黒いミヤマナルコユリの果実、ツタウルシ等々を観察し小休止。途中スズメバチの巣に遭遇するも無事通過し進む。ナラは南面、ブナは北面の解説を聞いてブナの北面（裏側）の分岐している所を見ると第二のポイント、「オシャグジデング」を発見。シダ博士山田先生の解説が始まる。夏出て秋に胞子を飛ばし冬を越す。ブナの木一本切るとは何万とゆう個体も殺す事になる。重大なことである。にうなづく。

続いて第三のポイント「ナガオノキシノブ」がブナの木から、こけと一緒に落下しているのを発見。貴重な物の様で写真撮影。展望台では登るはずであった磐梯山が山頂を除いて姿を表し感嘆の声をあげ、しばし休息。写真撮影。トチバニンジン、葉に一杯穴があいてるヤマモミジ等を観察。桧原湖を見下ろす休憩所で昼食。

そして下山、第四のポイント。「シダの宝庫」一箇所に6種類が同定された。ヤマイヌワラビ、ミヤマシケシダ、ミヤマワラビ、リョウメンシダ、ホソバナライシダ、オオバショリマ。これらの識別方法をじっくり解説頂いた。尚詳しくは山田恒人先生著、暦春ふくしま文庫「シダ植物の世界」をご覧あれ。カモシカの足跡、こしあぶらの花、笹の葉、熊の爪痕を眺めながら無事終了。

雨が降って来たビジターセンターで本日の総括。何時もの事だがこの会は最初と終わりがキチッと決って心地よい。東京から来る筈だったシダ大好き会員さんに思いを馳せて散会した。



ブナの森へ



オシャグジデング



シダの話聞く

西吾妻山登山道ロープ補修に参加して 我妻 三男

夏山シーズンの前に恒例となっている西吾妻、西大巔の登山道ロープ補修作業に参加した。今回はグランデコから入るA班と天元台から入るB班とに分かれて行われた、私はB班で行動した。天元台のロープウェイとリフトを利用したが係員の接客態度は気持ちが悪くなるほどの丁寧さだった。

ゴゼンタチバナなど小さな花を楽しみながら30分ぐらいで稜線に出た、人形石周遊のコースは木道が整備され以前歩かれて裸地化した枝道には丸太の通行止めが置かれていた。稜線の湿原には最盛期のワタスゲを見ることが出来た、梵天岩への登りではチングルマの群落が沢山あった。

若女平の分岐から避難小屋周辺、西大巔の鞍部への降り口あたりのロープ補修を行った。雪の重みで直角に曲がった鉄棒を力をこめて曲げなおし、倒れている鉄棒はハンマーで打ち直し、新しいロープを追加しながら切れたところやたるんだ所を補修した。

西吾妻は百名山に入っているので作業している横をツアー登山の団体が何組も通った。こうした登山客は自然保護について新聞雑誌などで意識はもっていることと思うが「徹底して守る」という気持ちになるとはなはだ疑問だ。「少しぐらい」「一人ぐらい」という気持ちが山を歩く人全員から無くなることを願う。登山道補修というボランティアを一人でも多く体験することができれば「裸地化」問題も意識されるのではないだろうか。

下山はボランティアに参加したことでもいつもと異なる充実感をもって歩くことができた。白布高湯で汗をながし福島に帰った、また来年も参加しよう。



「うつくしま自然展」開催報告

自然のすばらしさを多くの人たちに実感してほしい。そして、郷土の自然を大切にしたいと思う心を育ててほしい。また、自然豊かな福島県において、これまで残された膨大な資料(標本)の保管、専門的研究、NGO等の交流拠点、情報発信の場として「自然史博物館」の必要性を訴えたい。そんな想いを目的に「うつくしま自然展」が8月14日、15日の2日間、「福島県自然史博物館設立推進協議会=参加8団体」の主催(石川町協賛)で「コラッセふくしま」で開催され、500人近い一般来場者で賑わいました。

展示物は植物、野鳥、淡水魚、昆虫、鉱物と多岐にわたり、貴重な写真や標本など日頃見ることが出来ない展示品も数多くありました。また、体験コーナーやクイズも準備され、多くの子供達にも楽しんでもらうことも出来ました。守る会では、これまでの活動内容のパネルや写真の展示、そして会場内では異質ではありましたが登山道の裸地化など人と自然の関わりによって起こる各種の問題について提起を行いました。「今後も、機会があればこのようなイベントを開催していきたい」との声が参加8団体から聞かれるなど、「福島県自然史博物館」設立へのアピールに留まらず各団体間の交流が図られた有意義な2日間でした。(高橋淳一)



高山の原生林を守る会自然観察会の歩み

2004. 9. 30 現在

通算 No	観察会 No	開催 年月日	山城・地域	観察会テーマ	参加 人数
1	第1回	1987. 6. 7	高山	高山現地調査登山会	55
2	第2回	1987. 10. 18	高山	高山山麓のブナ林観察会（最初の一般公募観察会）	30
3	第3回	1987. 11. 5	的場川	的場川観察会	
4	第4回	1989. 7. 30	箕輪山	箕輪山麓横向スキー場開発によるブナ伐採実態観察会	
5	第5回	1992. 7. 12	幕川	幕川周辺ブナ観察会	13
6	第6回	1994. 5. 28	高山	高山の新緑観察会	25
7	第7回	1994. 6. 26	高湯	ヒメサユリ観察会	45
8	第8回	1994. 9. 4	高山	高山の植生観察会（福島県自然保護協会と共催）	
9	第9回	1994. 11. 6	二十日平	二十日平のブナ林観察会（福島県自然保護協会と共催）	
10	第10回	1995. 3. 5	二十日平	二十日平の残雪期観察会（観察会定期化）	18
11	第11回	1995. 5. 28	デコ平	デコ平遊歩道観察会	24
12	第12回	1995. 6. 25	鎌沼	鎌沼観察会	24
13	第13回	1995. 8. 27	西吾妻	西吾妻の湿原観察会（吾妻の森と緑のトラスト運動共催）	22
14	第14回	1995. 10. 15	中吾妻	中吾妻のブナ林観察会	44
15	第15回	1995. 11. 26	花塚山	花塚山の自然観察会	38
16	第16回	1996. 3. 9-3. 10	高山	残雪期高山ツアーコース観察会	7
17	第17回	1996. 4. 21	二十日平	二十日平の残雪期観察会（福島県自然保護協会と共催）	35
18	第18回	1996. 5. 26	的場川	的場川ブナ林新緑観察会	46
19	第19回	1996. 7. 28	早稲沢	早稲沢遊歩道観察会	60
20	第20回	1996. 9. 29	西吾妻	西吾妻源流の森計画予定地観察会（吾妻の森と緑のトラスト運動共催）	43
21	第21回	1996. 11. 24	新田川溪谷	新田川溪谷観察会（国見山の自然に親しむ会共催）	34
22	第22回	1996. 12. 8	大作山	大作山の自然観察会	25
23	第23回	1997. 4. 20	阿武隈川	阿武隈川下流域水辺の自然観察会	18
24	第24回	1997. 5. 25	塩の川	塩の川周辺の自然観察会	14
25	第25回	1997. 9. 28	的場川	的場川の水質調査と水辺観察会（福島県自然保護協会と共催）	17
26	第26回	1997. 10. 26	仙水沼	仙水沼紅葉観察会	21
27	湯田紀行	1998. 1. 24-1. 25	駒頭山	岩手県駒頭山調査山行（カタクリの会観察会参加）	3
28	第27回	1998. 3. 7-3. 8	高山	高山北尾根コース調査登山	5
29	第28回	1998. 4. 26	鳥子平-高山	北限のシラビソ観察会	28
30	第29回	1998. 5. 24	仙水沼	仙水沼新緑の森の観察会	40
31	第30回	1998. 8. 30	西吾妻	台風により中止	
32	第31回	1998. 10. 11	薬師森	吾妻連峰北面の自然・薬師森観察会	21
33	第32回	1998. 11. 29	楯森	ツキノワグマとブナの森観察会	31
34	第33回	1999. 1. 31	仁田沼	厳冬期高山観察会	14
35	第34回	1999. 3. 6-3. 7	高山	残雪期高山ツアーコース観察会	5
36	第35回	1999. 5. 9	鎌沼	鎌沼残雪観察会	23
37	第36回	1999. 6. 6	二十日平	二十日平新緑のブナ林観察会	30
38	第37回	1999. 8. 29	谷地平	谷地平清掃登山	27
39	第38回	1999. 10. 17	高山	高山南山麓ブナ林観察会	12
40	第39回	1999. 11. 28	女神山	女神山観察会	25
41	第40回	2000. 2. 6	峠	峠駅周辺観察会	15
42	調査山行	2000. 3. 4-3. 5	高山	残雪期高山南山麓ブナ林調査（オリジナルツアーコース調査）	5

通算 No	観察会 No No	開催 年月日	山域・地域	観察会テーマ	参加 人数
43	第 41 回	2000. 4. 23	吾妻小富士	雪ウサギ観察会	20
44	第 42 回	2000. 6. 4	中吾妻	ブナの新緑観察会	30
45	第 43 回	2000. 8. 27	西大巔	西大巔清掃登山	20
46	第 44 回	2000. 10. 22	高倉山	高倉山周辺観察会	11
47	第 45 回	2000. 11. 26	蟹ヶ沢	蟹ヶ沢周辺観察会	17
48	第 46 回	2001. 2. 4	女沼・仁田沼	厳冬の滝観察会	19
49	第 47 回	2001. 4. 22	高山	高山の雪上観察会	11
50	第 48 回	2001. 6. 17	西吾妻	西吾妻山観察会	15
51	第 49 回	2001. 8. 26	幕川	幕川周辺ブナ観察会	21
52	第 50 回	2001. 10. 14	中津川	中津川渓谷紅葉観察会	21
53	第 51 回	2001. 12. 2	榎森	第 50 回記念榎森観察会	18
54	第 52 回	2002. 2. 3	山鳥山	山鳥山観察会	18
55	第 53 回	2002. 4. 21	裏磐梯野鳥の森	裏磐梯野鳥の森観察会	20
56	第 54 回	2002. 6. 2	龍ヶ岳	水源の森復元ボランティア・龍ヶ岳観察会	48
57	第 55 回	2002. 7. 14	西吾妻	誘導ロープ補修ボランティア	13
58	第 56 回	2002. 8. 25	鬼面山	鬼面山親子観察会	14
59	第 57 回	2002. 10. 20	的場川	的場川渓谷紅葉観察会	23
60	第 58 回	2002. 12. 1	御在所	御在所山観察会	15
61	第 59 回	2003. 2. 2	十万劫	十万劫山観察会	18
62	湯田紀行	2003. 3. 1	方面森	岩手県方面森調査山行	3
63	湯田紀行	2003. 3. 2	未来の森	岩手県未来の森観察会	3
64	第 60 回	2003. 4. 20	台ヶ森	カタクリとブナの森観察会	10
65	第 61 回	2003. 6. 1	龍ヶ岳	水源の森復元ボランティア植林	28
66	第 62 回	2003. 9. 7	弥兵衛平	誘導ロープ補修ボランティア	16
67	第 63 回	2003. 8. 3	一切経	吾妻一切経山観察会	21
68	第 64 回	2003. 9. 7	東大巔	東大巔湿原植生回復作業	6
69	第 65 回	2003. 10. 26	遠藤ヶ滝	県民の森観察会	14
70	第 66 回	2003. 11. 30	半田山	半田山観察会	13
71	第 67 回	2004. 2. 11	信夫山	信夫山観察会	18
72	湯田紀行	2004. 2. 14	白木峠	雪の自然観察会 (カタクリの会観察会参加)	5
73	第 68 回	2004. 4. 25	榎森	スプリングエフェメラルと里山の萌黄観察会	21
74	第 69 回	2004. 6. 6	龍ヶ岳	水源の森復元ボランティア植林	31
75	第 70 回	2004. 7. 4	西吾妻	誘導ロープ補修ボランティア	17
76	第 71 回	2004. 8. 25	裏磐梯野鳥の森	裏磐梯野鳥の森植生観察会	19



第72回自然観察会・高土山紅葉観察会

日時：10月31日（日）7：30～16：00

集合場所 四季の里正面入り口交差点駐車場 集合時間 7：30 参加定員 20名

内容 奥羽山脈花紀行で紹介された山の紅葉を楽しみます。恒例の芋煮会です。

日程 8：00（四季の里発・東北自動車道利用）9：20（高土山登山口）9：40～12：30（自然観察）12：30～14：00（芋煮会）14：30（高土山登山口発）15：50（四季の里）

準備するもの 登山靴・ゴム長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、昼食、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円）+材料費（700円）

申し込み：10月30日（土）まで

参加申込先：高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）

電話またはメールにて返信ください。（電話申込はいずれも夜間7時～9時でお願いします）

第73回自然観察会・安達太良・前岳観察会

日時：11月28日（日）8：00～16：00

集合場所 県民の森駐車場 集合時間 8：00 参加定員 20名

内容 里山の雑木林を訪ね、冬芽の観察を楽しみながら登山道整備の実態も観察します。アットホーム大玉で汗を流した後、総会です。なお総会のみのお出席もOKです。総会は定員はありません。

日程 観察会 8：30～12：00 総会 13：00～15：00

準備するもの 登山靴（長靴）、雨具、スパッツ類、帽子、手袋、昼食

*装備について不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円） 申し込み：11月27日（土）まで

参加申込先：高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）

電話またはメールにて返信ください。（電話申込はいずれも夜間7時～9時でお願いします）

第25回東北自然保護の集い

テーマ：ダム開発と公共事業を考える

1. 日時：10月16日（土）13：00～17日（日）11：30
2. 場所：山形県最上町赤倉温泉 お湯トピア（集会場）、湯守りの宿「三之函」（宿泊・交流会）
3. 内容：基調講演（天野礼子：国内外のダム開発とその課題）、現地報告、分科会（①ダム開発と公共事業を考える ②あらためて林野行政を考える ③これからの東北の自然保護運動を考える）

* 参加希望の方は高橋まで連絡ください。



新年度の会費納入をお願いします

郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

[編集後記]今回は50号を記念して20ページ仕立てにしました。寄稿していただいた方々、有難うございました。■積重ねた観察会で、確実に自然保護の輪が広がっていることを実感しています。■会報を点検して見たところ第4回観察会が抜けていました。これに未カウントの公開ボランティア3回分を併せて観察会に組み込み、観察会のNoを4回加算し訂正します。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第50号 2004年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HPアドレス <http://www.h4.dion.ne.jp/~pomo/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：奥田・佐藤・山内・鈴木